

原子力規制委員会
敦賀発電所敷地内破砕帯調査に関する有識者会合
評価会合後の臨時記者会見録

- 日時：平成24年12月10日（月）16:40～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：敦賀発電所敷地内破砕帯の調査に関する有識者会合（有識者）

島崎邦彦 原子力規制委員会 委員長代理

鈴木康弘 名古屋大学 減災連携研究センター 教授

堤浩之 京都大学大学院 理学研究科地球惑星科学専攻 地球物理学教室 准教授

藤本光一郎 東京学芸大学 教育学部 准教授

宮内崇裕 千葉大学 理学部地球表層科学領域 教授

<質疑応答>

○司会 それでは只今より、敦賀発電所敷地内破砕帯調査に関する有識者会合の後の記者会見でございます。それでは質問のある方、挙手していただいて、マイクが届いて、所属とお名前をおっしゃってから質問の方をお願いしたいと思います。時間の関係もございますので、あまり時間が取れないことをご容赦いただきたいと思います。それではご質問のある方。はい、ではNHKのオカダさん。

○記者 NHK オカダです。まず島崎委員に今日の評価会合の結果を改めてお伺いしたいということです。活断層だという判断をしたこととその根拠についてお答え頂きたいと思います。

○島崎委員 お話はそのいくつかに分けて質問されるということですか。要するに活断層のことだけということですか。

○記者 今日の評価会合の結果と、その結果に至った根拠を教えてください。

○島崎委員 詳しい表現ぶりはこれからメール等々で考えますので、ややニュアンス的には必ずしも正確でないことをご承知おき頂きたいと思いますが、いわゆるD1トレンチと呼ばれるところの掘削したところの中で、西のピットと呼ばれているところに現れた断層、ずれですね。これがおそらく基盤と思われる花崗岩まで達していて、その時代としては十数万年前まで考えられると、皆さんが考えられているということで、活断層と言って差し支えない。ずれは横ずれと逆断層、縦ずれがあつて、動きはおそらく浦底断層とよく似た動きで、しかも非常に近いところですので浦底断層の動きによって一緒に動いた、そういう活動であろうということです。

そして、その位置はD1と呼ばれている破砕帯に非常に近いと言いましょか、そのD1をどう解釈するかにもよるのですけれども、あるいはその分岐の一部なのか本体なのか、その辺りは色々解釈が分かれるかと思いますが、D1破砕帯である可能性があるとい

うことです。

- 記者 もう一問。これはもちろん委員会での判断になるかと思いますが、事実上これで原子炉の直下に活断層が走っているということになるかと思うのですけれども、これについて規制委員会としてというか、島崎委員として、どういう手続きといたしますか。実質、運転再開出来なくなると思うのですけれども、その辺りの見解を教えてください。
- 島崎委員 これは委員長も言われていたとおりでありまして、現状ではそういったことに至る前の段階であると、そういうところには至らない段階であると、そういうふうに言われましたし、私も同じように思っております。

○司会 はい。次の方いらっしゃいますか。はい、シズメさん。

○記者 共同のシズメです。

概ね2点お願いします。まず、藤本先生、確か100%ではないとおっしゃっていたかと思いますが、どういうところがまだ100%には足りないとお考えでしょうか。

- 藤本准教授 西側ピットのところの破砕帯が、ピットの底では活断層を切っておりますが、それより下のところで、まだどこにどの程度の規模の破砕帯が続くのかということが分かりません。西側ピットの底のところも地震性滑りが起こったかどうかということはまた調べてみれば分かると思いますが、浅いところですので、あるいは柔らかい堆積層の中だとあまりそういうものは明瞭に残らないかもしれません。そういう意味でももう少し深いところで確実に地震性の滑りを起こしたかどうかですとか、そういった事が分かれば100%だと思います。その点のデータが、今我々は持っていないと。
- 記者 定性的にはそこに活断層があるということは言えるけれども、定量的にどれだけの規模があるのかということが言えない、というような理解でよいですか。
- 藤本准教授 そうですね、そういうことで良いと思います。浅いところで堆積層の中で消えていますけれども、それほど規模が大きくなければ地表、あれでも十分地表近くまで来ているわけですが、地表面に完全に抜けるという、どこかの層と層との間で活断層が切れる関係ではないということも十分考えられると思いますので、そういった理解で良いと思います。
- 記者 もう一つ島崎先生。
お話を伺っていると、必要な情報としては最低限集まっているというふうに聞こえるんですね。今後、原電は追加調査をするという意思表示をしましたが、まだ判断する上で足りない情報というのはあるのでしょうか。それとも既にそれはあるということの良いのでしょうか。
- 島崎委員 今日は今までに集まっているデータを総合的に判断して、一つの判断を下したという事だと思います。
- 記者 つまりいつまでに追加調査をして欲しいということは、原電に対しては求めないわけですね。

○島崎委員 はい、特に今日は求めておりません。

○記者 わかりました。

○司会 はい。次の方いらっしゃいますか。はい、フナコシさん。

○記者 読売新聞のフナコシと言います。

島崎先生にお伺いしたいのですけれども、今のその根拠の中で、時代としては十数万年前までと考えられるというふうに言われていましたけれども、まずこの十数万という数字が出てきた根拠を教えてください。

○島崎委員 これは専門家の方にお答え頂いた方が良いかと思しますので、堤さんよろしいですか。

○堤准教授 D1 トレンチのところに5層という層がありまして、そこにKTZという9万5000年程前に降った火山灰が入っています。断層はそれよりも下位2～3mのところまで断層の先端が延びていまして、それは3層と言われる地層です。3層と5層の関係は不整合、ちょっと堆積が連続でないような関係を示すところもありますが、大きな時代の堆積の間隙があるようには見えませんので、それで10数万年前程の堆積物であろうと判断をしています。

○記者 それはKTZがあつて、そこからそのあとは長さの関係で総体的に見えるというそういう理解でしょうか。

○堤准教授 長さとかそのような定量的なものではなく、もう一つは、下位の地層、2層だとか1層、より基盤に近い方は風化をしまして、かなり中に含まれている礫が腐っているといいですか風化をしています。それに対して3層はそれ程風化も進んでおらず、新鮮な様相を呈しているのも、それ程古くはないであろうということでも十数万年と。KTZが降った以前、それ程古い時代まではさかのぼらないであろうと判断しました。

○記者 最後に一点で、島崎先生になんですが、これまでの基準だと所謂12～13万年という話だったのですけれども、要するにそれにはこだわらずに十数万という、細かい数字は分からないけれども、今までに言っていた40万年以内に入るのもこれは活断層だというそういう判断で宜しいでしょうか。

○島崎委員 はい、そのように考えていただいて結構だと思います。

○司会 はい、次の方いらっしゃいますか。はい、オカダさん。

○記者 毎日新聞のオカダです。

島崎委員にお伺いしたいのですけれども。西側ピットで見つかったずれば、今おっしゃられた年代などの理由で活断層とみなせて、そのD1、所謂2号機直下を走る破碎帯との連続性については、どのような根拠で判断されたのかを教えてください。

○島崎委員 色んな場所でD1ではないかというものがボーリング等によって調べられています。およそ断層の伸びる方向が南北で西に80度くらいで傾斜しているのが一般的な

傾向です。今回の西のピットの基盤のところを走る断層の伸びる方向、傾斜はほとんどそれと同じですし、それから、その下にあると思われるボーリングの中の割れ目、これは一番よく見ていただいた藤本さんが、これではなかろうかと言われているものが、ほぼ同じ南北に伸びて 80 度西に傾斜していて、位置としても西ピットへ出てくるような割れ目だと考えても良い位置にあります。そもそも西ピットの位置が D1 と呼ばれている破砕帯の延長に非常に近い。事業者が D1 破砕帯と呼んでいるものから水平距離で 8m くらいのところにありますので、そもそも D1 破砕帯自身が全て連続した一つの破砕帯なのか、途中で、我々ステップと呼びますけれども、横に飛んで、間が空くような形で続いていく、そういうことは断層・破砕帯にはよくありますので、そういったもの。あるいは途中で多少曲がったりすることもあります。そういうことを総合的に判断すると D1 の延長あるいは D1 と考えても良い。少なくとも可能性があるというふうに判断できます。

○記者 一応確認ですけど、そうすると延長部が活断層と見なされるということは、直下の破砕帯も活断層と見なせるということで良いんですよね。

○島崎委員 はい。そういう可能性が考えられる。

○司会 はい、次の方。ソバタニさん。

○記者 産経新聞のソバタニと言います。

浦底が繰り返し動いて、最近だと 4000 年前でしたか、1000 年単位の動きだが、今回は 10 数万年という、時代にはだいぶ大きなずれがあると思うが、もちろん必ず動くものではないのかもしれないが、その辺の解釈を教えてください。

○島崎委員 基本的に毎回浦底と一緒に動くものではないと思います。何回かに 1 回お付き合いをしているということ。それから、我々が今手にしているデータが非常に限られていて、地表に一番近いところとして、今、KTZ の 2,3 メートル下ということだが、あの膨大なトレンチは全部、土をとってしまったわけですので、我々が見ることができない方向が実はたくさんあるわけです。

そういうことも考え合わせて、我々が言う KTZ の下、2,3 メートルというのはある意味一点を見ているということになりますので、例えばその延長上がどうなっていたかというのは、実際は空気中になっている。そこがどういう形であったか、実際わからないわけで、そういう意味では非常に限られたデータを使っているということも十分考慮する必要があると思います。

○記者 原電の方は追加調査をしたいし、今回見つかった断層部分の年代調査もしていると聞いているんですが、例えばそれを待ってからでも結論は出せるかとも思えるんですが、それ待たずに今結論を出してしまうのは。

○島崎委員 今の時点での結論が出せたということですよ。

○司会 よろしいですか。それでは、コイケさん。

○記者 朝日新聞のコイケと申します。

島崎先生に。鈴木先生が最後に少し触れていましたが、今回の調査では1号機の下に伸びる、D5とかD6については見るができなかったのですが、今回はD1が動く可能性が非常に高いというか、活断層であると見なせるという結論で、2号基についてはある程度の方向性が見えてきたが、1号機の下にあるD5、D6については、今後も調査を続けるのでしょうか。それともD1が動くかもしれないということで、近くにあるD5、D6も動くことが合理的に考えられることになるのでしょうか。

○島崎委員 我々が調査をするのではなく、原電が調査をしているということで、今後も継続と言うことであれば、それはそれで結構なことだと思っています。

○記者 今後続く、今、縦穴を掘っていましたがD5、D6についても直接調査ができるとなれば、その時には、D5、D6についても5名の有識者会合が改めて調査するのでしょうか。

○島崎委員 いつになるかわからないので何とも申し上げようがないが、必要であれば我々が調査することはやぶさかではありません。

○司会 よろしいですか。それでは、カワイさん。

○記者 日経新聞のカワイです。

浦底断層そのものの危険性についても今回ご意見が出ていましたが、敷地内に浦底断層そのものがあることについて島崎先生がどう判断されているか教えてください。

○島崎委員 そもそも敷地内に活断層があるということは、わかっていたら普通そこには、造らないと思います。

○記者 今回、どのように敷地内に活断層があること判断され、判断の中に、浦底断層が一級の活断層という話がありましたが、その話を考慮に入れているのか教えてください。

○島崎委員 皆さんの判断の中には一部考慮に入っていることがあるかもしれませんが。私は、それを考えなくても、という気がします。同時に活動したという意味では非常に大きな断層が横にあって、しかも非常に近くにあるのを考えると、それに伴って近くにある破碎帯が活動したというのは非常にあり得ることですので、そういう意味では判断のどこかに入っているのではないかと思います。

○記者 最後に3、4号機の増設を原電が提出していますが、この立地の審査についてはどうするのでしょうか。

○島崎委員 それについては、まだ検討していません。

○司会 はい、他にございますか。

○記者 福井テレビのサガミと申します。

島崎委員長代理に伺いたいのですけれども、これまで事業者は数ヶ月かかっても結論が出ていないにも関わらず規制委員会は2日で結論がでたということで、この差が出て

くるのはどうしてかということと、また、数ヶ月かかって結論が出せない事業者の調査に対するご意見ありましたら伺わせてください。

- 島崎委員 やはり事業者は非常に微妙な立場に、特に調査をされている方自身がそういう立場に置かれていると思います。
- 記者 微妙な立場とは、もう少し具体的にお願いします。
- 島崎委員 基本的には活断層ではないことを証明するために調査を続けられてわけですから、その証明できない限りは、ある意味、調査を続けなければいけないという立場で、それは、我々とは立場が全然違います。

○司会 よろしいですか。それでは時間の関係上、あと、お一人でお願いします。はい、読売のタカダさん。

○記者 読売新聞社のタカダです。

島崎委員長代理と鈴木先生にお聞きしたいんですけど、まず、島崎先生には、今回の調査は大飯に比べて早く結論が出たような印象がありますが、これは浦底という大きな活断層があったが故に早く答えが出たのか、それとも単に原電のデータが関電に比べて、揃っていたから出たのか、それについて教えてください。

○島崎委員 原電の調査は、非常に多岐にわたって、かつ、詳細にされていっていました。そのことに関しては、我々も多分一致して、きちんと調査されているという認識があります。大飯とは、ものが違うし調査手法も違うので比較はできませんが、今回の結論をもし皆さんが早いというのならば、私は早いとは思いませんが、個人的にはデータが揃っていれば皆さんの意見は一致するはずですので、きちんとしたデータがあれば判断は早いと思っていますので、2日の調査で簡単に結論を出したと思われるのは心外だと思います。

きちんと調査がされていて、きちんとしたデータがあれば、日にちはある意味関係ない、皆さんが一致した結論になる、というのが私の思いであります。お答えとしては、大飯と比べるという点は除けておいていただければ、事業者さんの調査が行き届いていたということに尽きると思います

○記者 では、大飯との比較ではなくて、今後の東通、志賀・もんじゅ・美浜などの調査すべきところ控えています。原電は、やはり浦底があるから調べやすかったということか、それとも関係ないのか、その辺りはどうでしょうか。

○島崎委員 基本的には関係ない。浦底も重要な一部ですが、基本的にはそれだけではないと思います。地域によって全て状況が違うので、どれだけデータが揃っているかというのが、やっぱり一番重要な点だと思います。

○記者 わかりました。ありがとうございます。鈴木先生にですが、評価会合の中で、過去、昭和55年辺りの資料で、その説明の中で追加調査をしていながら設置許可が出ていたことについて残念だと発言がありましたけれども、安全審査に甘さがあったのではと

いう印象を受けたのですが、いかがでしょうか。

○鈴木教授 私が申し上げたのは、昭和 55 年 8 月の資料に非常に浦底断層が活断層であることを思わせる資料が出ているにも関わらず、その 1 ヶ月後の 9 月には設置許可が下りたということから、十分そのことが反映されなかったのではないかという思いを持ちました。ただし、そこはいろいろ検証していかなくてはならないと思っております、例えば活断層の基準も当時は 5 万年という基準でしたから、その時の尺度で合わせれば活断層でないと言えると判断されたのかもしれませんが、そもそもその資料が審査の過程の中で、どの程度反映されたのかについては、私も推測しているだけです、実際のところはよくわかりません。ただし、本当に 1 ヶ月後に許可が下りてしまっていて、このスケッチを見ていれば、やはり活断層だと私どもは思うのに、それがそうならなかったということについて、当時の審査の仕方がどんなふうだったのかについては、検証されるべきことだと思っている。

○記者 ありがとうございます。

○司会 以上で会見を終わります。

○記者（共同通信シズメ記者） 一点だけ。設置許可は昭和 57 年（1982 年）頃ではないでしょうか。今おっしゃった「1 ヶ月後に」というのは、一次審査が終わったのではないのでしょうか。やはり一次審査ですか。わかりました。ありがとうございました。

○司会 以上で会見を終わります。どうもありがとうございました。